



図① 1962年の深江港 魚屋道起点

田中画伯は、一九二二年（大正十一）に現在の神戸市東灘区御影石町に生まれ、戦前の旧制中学時代に美術部で絵を描き始めた。建設会社勤務時代も描き続けて、定年後にはバイクに絵の具を積み、夏はテント、冬はユースホステルを利用し、日本だけでなく海外でも

## 田中邦彦画伯の懐かしの風景画

史料館副館長 道谷 卓

史料館では、御影町石屋生まれの田中邦彦画伯の遺族から、東神戸の懐かしい風景を描いた作品を多数寄贈していただいたので、二〇二三年（令和五）十月一日から、企画展として「東神戸 懐かしの風景展」を開催した（十二月三日まで）。

スケッチ旅行を続け、漁村や街道など失われる風景を描き続けた。創造美術協会会員。二〇〇七年（平成十九）三月に、八十六歳で亡くなった。

今回の企画展では、田中画伯が描いた数多くの風景画のうち、東灘区を中心に東神戸の昭和の古き良き時代を描いた作品を遺族から寄贈していただいたので、その中から史料館のある深江地区や、画伯の生まれた御影をはじめ、東灘区から灘区にかけての作品を九点、展示した。このうちの一点①一九六二年の深江港は、十月からの企画展に先立ち、「ひょうごプレミアム芸術デー」に協賛して、七月から先行展示したものである。この「一九六二年の深江港 魚屋道起点」は、埋め立てが始まる前の深江の浜で、漁業が盛んに行われていた頃の様子を描いている。

十月からの企画展では、①のほか、②「深江漁港と商船大学進徳丸」（東灘区深江南町五丁目）、③「灘魚崎郷」（桜正宗、一九六二年、同区魚崎南町四丁目）、④「御影浜街道」（同区御影本町六丁目）、⑤「御影浜街道」（同区御影本町八丁目）、⑥「石屋川河口」（泉勇之介商店、一九九二年、同区御影石町一丁目）、⑦「酒蔵」（白鶴酒造石屋蔵、同区御影石町一丁目）、⑧「新在家の運河」（灘浜運河、大黒正宗、同区御影塚町一丁目）、⑨「小泉製麻」（灘区新在家南町二丁目）の作品を、史料館一階の季節の展示コーナーに展示した。これらの作品は、絵の表や裏に画伯自らタイトルと年代を書いたものとタイトルだけで年代の書かれていないものがあり、年代が書かれていないものについては、少なくとも一九九五年（平成七）の阪神・淡路大震災以前に描かれたものだということは間違いないように思われる。



図② 深江漁港と商船大学進徳丸



図③ 灘魚崎郷



図④ 御影浜街道（御影本町6丁目）

それでは、②以降の絵について見てみよう。②「深江漁港と商船大学進徳丸」は、年代が記載されていないため、描かれた年は不詳である。ただ、進徳丸が、旧神戸商船大学（現・神戸大学海洋政策学部）構内に陸上船舶として保存されたのが一九六七年（昭和四十二）であることと、深江浜の埋め立てにより最終的に深江の漁業協同組合が解散されたのが一九七二年であることから、②はこの間に描かれたものと思われる。③「灘魚崎郷」は、灘五郷の酒蔵地帯のうち、東郷とも言われる魚崎郷の代表的な蔵である櫻正宗のレンガ造りの酒蔵（絵の左端の建物）を描いている。一九六二年の年代が入っており、当時の蔵

の外観がよくわかる。ここに描かれている酒蔵の建物は、阪神・淡路大震災で全て倒壊してしまい、酒蔵としての再建はなされなかった。

④から⑦の四点は、画伯の生まれた御影を描いたものだ。この四枚は、描かれた場所が特定できることから、展示では定点観測ができるよう、現在の現地の写真をあわせて展示した。④と⑤の「御影浜街道」は描かれた年代は不明であるが、戦前は本通りと呼ばれていた旧御影町の中心的な場所である。太平洋戦争の空襲からの被害も逃れ、江戸時代以来の古い街道の街並みが残る一角であったが、ここも一九九五年一月の阪神・



図⑤ 御影浜街道（御影本町8丁目）



図⑥ 石屋川河口



図⑦ 酒蔵（白鶴酒造石屋蔵）

淡路大震災で街並みが倒壊してしまった。したがって、この二枚の絵も震災前に描かれたものである。④は今でも、震災前の電柱と一方通行の道路標識がそのまま残っているが、絵の中央に描かれた青果店は、住宅になってしまっている。⑤は現在、新しい家が建ち並んで震災前とは街並みが変わってしまったが、絵の中央に描かれた地蔵尊の祠は今でも健在である。

⑥「石屋川河口」は一九九二年の作品で、御影郷の泉勇之介商店（一八八二年〈明治十五〉創業）の木造蔵を描いている。この蔵は、阪神・淡路大震災で被災・倒壊した御影郷の酒蔵で倒壊を免れ、震災後も唯一操業していた木造蔵だが、二〇一三

年に廃業し、翌二〇一四年に取り壊され、現在では別の建物が建っている。なお、奥に見える赤い橋（灘大橋）が、同じ地点だということを示している。

⑦「酒蔵」も描かれた年代は不明であるが、阪神・淡路大震災前の作品であることは間違いない。これには木造の白鶴酒造石屋蔵が描かれているが、この蔵も阪神・淡路大震災で倒壊した。倒壊後、建物は撤去されたが、絵の左下に描かれた波返し（かつての砂浜の名残）は残っていた。その波返しも二〇〇五年に現在の施設を建設するために撤去された。今は、木造蔵の間の道路だけが当時のままである。



図⑧ 新在家の運河

⑧「新在家の運河」の作品に描かれた木造の酒蔵は、大黒正宗の銘柄で知られる安福又四郎商店の蔵である。この木造蔵も阪神・淡路大震災で倒壊しており、描かれた年代は不明であるが、阪神・淡路大震災前の作品である。大黒正宗は、今でもこの場所の一部で日本酒を販売するが、蔵の建って行った敷地は商業施設に変わっている。

⑨「小泉製麻」は、一八九〇年（明治二十三）六月創業の小泉製麻株式会社（創業時は有限責任会社都賀浜麻布会社）の本社屋として使用されてきた木造二階建ての建物を描いている。この建物はその後、一九九一年（平成三）年に商業施設として開業したROKKO23（ヴァントワア）の一部として利用されたが、これも阪神・淡路大震災で倒壊してしまった。

今回の展示では、画伯の九点の作品を展示したが、このほかにも多くの絵画を遺族から寄贈

していた。史料館では、今後、これらの作品を順次展示していこうと考えている。その際、描かれた場所と年代が特定できるものについては、現在の様子を写真に撮り、定点観測ができるような展示を行う予定である。



図⑨ 小泉製麻（旧本社）

◆研究員の水口千里さん死去 水口千里さんが二〇二三年六月二日病氣のため死去した。水口さんは民俗学専攻。『本庄村史 地理編・民俗編』（二〇〇四年）の「神戸深江生活文化史料館について」を執筆、資料の概要や展示解説、史料館の今後の展望を示した。また史料館の展示解説『まちの歴史とくらし』（二〇〇五年）も中心になって編纂した。

編集／大国正美  
発行／神戸深江生活文化史料館  
〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17  
☎ 078-1453-4980

<http://fukae-museum.la.coocan.jp/>

『生活文化史』 第52号 2024・3・31